

昭和四十八年度第一回
邦人講師講演会記録

アジアの新しい関係と中国

東京外国
大学助教授

中 嶋 嶺 雄

社団法人 アジア親善交流協会

本日私に与えられたテーマは「アジアの新しい国際関係と中国」ということであるが、講演依頼を受けた時点と今日ではかなり新しいいろいろな問題が出て来ているので、主としてアジアの国際関係はともかく、中国関係、我国をめぐる最近のさまざまな国際関係の中で、いろいろな問題を指摘しながら、或は皆様の御批判を仰ぎたいと思つてゐる。

そこで私は、過日の廖承志訪日団、大変日本でも大騒ぎされたが、この訪日団の残したものは何であつたか、この廖承志訪日団は今日の中国の政治的潮流とどういふ関連を持っているかということをまず第一に考えて、次に最近この問題とも関連して、中国側の台湾に対する、或は在日華僑に対する働きかけが非常に活発になつて来ているので、これらの問題を含めて、二番目に台湾を中心とする国際関係を考えてみたい。

その背景にある中国をめぐる国際関係、特に中ソ関係の新しい動きについて三番目の柱にしてみたいと思う。

廖承志訪日代表団の意味するものと中国の政治的潮流

御承知のように、廖承志訪日団は大変な話題を投げていつたわけで、皆様方の中にも接触の機会を持たれた方もあると思うし、この間マスコミを中心として、この問題につきいろいろ紹介されていたが、御承知のように今日のマスコミには幾つかのタブーがあつて、その為か、国民がもつとも知りたいことについては意外に報道がないわけである。

今日、いわゆる言論の自由ということがいろいろ問題になつて来ているわけだが、私は必ずしも自分の言いたいことが言えないからということが、言論の自由の危機とは思つていない。むしろそれより、一種のタブーが我国には非常に多く存在しているわけであつて、このタブーに対し、新聞が全く、いわば問題を回避しているということにこそ今日の大きな問題があるかと思う。

その中で、御承知の通り中国問題は一つのタブーである。だから、例えば廖承志団長がなぜ美濃部都知事に会わなかつたのかということ、或は、美濃部知事はなぜ廖承志団長に会わなかつたかということは、実は一番報道してほしいのだし、恐らく一般の国民はそういう事実を聞くと、そんなこともあつたのか、北朝鮮から新聞代表団が来てさえもすぐに美濃部知事の所を表敬するわけだが、今回、ホテル・ニューオータニに陣取つて、あれほど長期間首都に滞在しながら美濃部知事とは接触がなく、又美濃部知事の方も非常に慎重

というか、消極的であつて、唯一つの接触の機会であつた上野公園のパンダハウスの開会式には、御承知の通り奥さんをさし向けているわけである。

この辺の問題一つを考えてみても、最近の美濃部都政のいろいろな問題が浮きぼりされてくるわけであるし、京都の嵯峨川知事が美濃部知事に会わなかつたことは、ある意味で週刊誌的な興味からも非常に解るのだが、昨年か、一昨年か、美濃部知事は中国に例の書簡を携えて行つた方だし、当然、表敬訪問なり、何か双方の交流があつて然るべきであつたが、御承知のような結果に終つた。

このことは実は一種のタブーであつて、中国問題についての非常なセンシティブな問題については応じない。又、美濃部都政についてもタブーがあるので、この問題もあまり追求したくないという姿勢がどこかに表われていたのではないかと思う。

最近も、ある新聞の方々と、ある新聞の關係している中国の年鑑類の編集に關して、新聞は、ともかく年鑑を出す場合に中華民国をどのようにに取り扱うであろうかという問題、もとよりこれも当然考えなければならぬが、一方新聞は、蔣介石總統が亡くなるという事態を仮定して、どういふ記事を書こうという予定原稿を作っているかという事に關して話合つたのだが、その時には勿論「總統」といふ言葉を使わないといふことで記事が進んでいるし、そうすると蔣介石氏ということになるのだが、当然「中華民国」といふ言葉もそこに出ないわけである。

しかしながら、次の総統は誰であろうかという推測記事を書くのは当然の責務であるが、仮に蔣経国がそうなると仮定しても、蔣経国が次の総統になるという言葉は書くことをやめようという内示があるわけである。一部には既に、蔣介石集団と書いたらどうかと新聞社の中で合意が進みつゝあるようだが、ともかくそういう事態の中で、我々は中国なり中国問題を考えていかなければいけない。

私のように中国問題をやつていると、そういう点でも非常にストレスの多い仕事で、中国問題そのものにいかにストレスが多いかということにいさゝか耐え兼ねている状態であつて、その中で私共は出来るだけリアルに分析し、究明して行かなければならない問題が山積しているわけである。

第一の問題に戻つて、廖承志訪日団の基本的性格は何であつたか。私はその性格の第一は、いわばデイスカパー・ジャパンにあつたと思う。というのは、廖承志訪日団は日本に對する再認識というか、ともかくカメラで写真を取りまくり、中国では写真を取る場所はいちいち許可を受けるのだが、日本ではそういう必要がないというので驚いていたようであつたが、それに見られるように、日本に於けるさまざまな認識を深めていつたことは言うまでもない。

そして、その認識というのが、従来はほぼ十年近く一部の知日派、孫平化、趙向前という人はともかくとして、他のメンバーが日本をまともに知つていたことはないわけで、最

近こそなくなつたが、こゝ一年半位前には日本は大変な「軍国主義日本」という形で描かれていた。食糧にも不足し、学生は銀座で花を売らなければ学校にも行かないのだという貧困と飢えの日本の中で、ミリタリズムだけが跋扈しているという姿で日本を描いていただけに、今日の訪日団はある意味で大変な衝撃を受けて帰つて行つたのではないかと思う。そしてこの日本を知るということが、今後の中国の対日政策に非常に多くの影響を投げかけるのではないかと思う。

第二に、意外に気付かれていないことだが、今回の廖承志ミッシェンというのはいわば二重構造であつて、今の中国の政治的潮流のメインストリームに密着している部分が大半を占めながら、その中にはいわば文革ラディカルの生き残り、左翼的潮流の生き残りと思われる人もいるわけである。大半は、ほぼ文革の時期、廖承志を始めとして副団長級はすべてといつてよいほど姿を消していた人達であるので、その点ではかなり現実主義的なアプローチをする人達ではあるが、その中に文革ラディカルの人がちらちらまじっているわけで、そういう人達を含めて、団員そのものに対するインドクトリメーションというか、再教育という意味もあつたのではないかと思う。

この辺が廖承志訪日団そのものの中国側に立つた場合の大きな目的ではなかつたかと思う。もとより我々としては、そのようなことだけで問題を考えてよいわけではない。御承知の通り、舊な微笑外交、対日交流において非常に柔軟な姿勢を示しているながらも、じわ

じわと政治的色彩を出して来たわけである。

たゞ、その政治的色彩の出し方が従来と違うことは、対日接近を非常に拡大しながらも、出来るだけ広範囲な新しい友人の拡大、いわば日本に於ける親中国派―プロチャイナ、プロ北京―というものを、従来のパイプでなく、ある意味で従来の古き友人でなく、もつと広い層に拡大したいという意図が非常に強かつたことはいうまでもない。

こういうように考えると、今度の訪日団の中でむしろあせていたのは古き友人ではなかつたか、古き友人達が今度の訪日団のお膳立てをしたわけだが、そういう人達がこういう活躍をする最後の機会かも知れないと思われるような広範囲な接触を残していつた。古き友人達が北京にご注進する日本に関する情報と、自分達がこの目で見た日本がいかに違っているかということに彼らは気がついたのではないかと思う。この点でも私は注目すべきものがあつたのではないかと思う。

こういう形で拡大が進み、その延長線上にあつたのは、この際新しい友人の拡大は、日本の政府レベルはもとより、大企業との接触によつて今後の当面する中国の経済的再建のみならず、対ソ軍事防衛の爲の中国自身の国防の再建に日本のビッグ・ビジネスというものを引き込もうという意図が見られたことはいりまでもない。かつてあれほど批判していた日本の企業である三菱に対して、今回は中国側がもつとも積極的であつたということもこのような問題を示しているかと思う。

そして次の問題は、いうまでもなく、同時に、日ソ関係に水をさすという目的が露骨に現われていた。それから最後に、在日華僑を通じての北京サイドのさまざまな働きかけがあつたわけである。

こういうように考えてみると、廖承志訪日団というのは、一見非常に現実主義的な動きをしながら、それがさまざまな目的というのが幾つも絡み合つていたわけであつて、こういうことを含めて今回の廖承志訪日団を我々は見ておく必要があるのではないかと思う。

とかくマスコミが騒ぎ、我々も驚いたが、国会議長が議長席に廖氏を着けたわけで、私は記念すべき写真だと思つて切り抜いてあるのだが、そういう中で、いわば彼らの目的というものは我々にも充分解つて来たのではないか。

ただ、問題は確かに廖承志という人は日中関係では非常に名の知れた人であるし、ある意味で最高のレベルの知日派であるが、廖承志自身の政治的なステイタスというのは今日の中国の中で二十番目の中に入るといふことはいえないわけで、もう少し下にランクすべき人である。ましてや民間の訪日団であるわけで、しかも、どちらかというところ、日本のレベルに喩えれば参事官級の人達であつて、日本には確かに友人も多いであろうが、それ位の人物の訪日であるにかゝらず、国賓待遇で国を挙げて迎えたなら、仮に今度は周恩来なりが来たら日本中はどういうことになるのか、全部の国民が沿道を埋めなければ釣り合わないのではないかと思われる。そういうことは、離れた立場から見ていると興味あること

であつたが、以上のような問題がいろいろあつたように思う。

そこで廖承志訪日団は、中国にとつても非常に日中関係の上で大きな意味を持つていた。それは、単に彼らが知日派であつて日本で大歓迎され、その意味で大変な成果をあげていつたということではなくて、今日の中国の政治的な潮流と非常に密接不可分だということが言えるわけである。

ここで、最近の中国の政治情勢について若干お話ししなければならぬ。というのは、一つ具体的に例をとると、鄧小平の一件をあげてみるのが最も皆さんも興味深いと思う。

今回の鄧小平の一件については、私自身自分の著書の中すでに林彪事件の頃から予測していた。昨年十月頃、文芸春秋に書いた論文の中にもこのことを書いていて、いわば現在の中国で進んでいる脱文革化、或は最近では文革否定といつてもよいだろう。そういう傾向が進むならば、悪の代名詞と名差された以外の予想外の人物が復権するであろう。しかも、その人物が林彪事件と無関係であるなら、そういう大物級幹部の復権があり得るだろうと予測して、劉少奇の復権はあり得なくても鄧小平が近い将来復権しないとはもはや言えなくなつたと述べたが、まさに今回その通りになつたわけである。

しかしながら、御承知の通りこの鄧小平の復活については日本の新聞も大あわてをしたようである。それは文化大革命が成功し、深まり、毛沢東の論理が定着し、今日の文化大革命が闘争批判改革という段階に入つて行くのだと信じ込んでいた人達には鄧小平復活の

論理が明らかでなかつたと思う。そこで、非常にあわてゝ、これは毛沢東の温情主義的な幹部政策の故である。いかに毛沢東は寛大であるかというように報道していたようである。ところが実体はそれとは全く逆であつて、結論的にいうと、今日の中国は政治的に非常に多くの問題を持つてゐるわけで、そういう状況の中で鄧小平が復活をする政治的潮流というものがあるということである。

鄧小平を復権させざるを得ないような状況が中国にある、これはいうまでもなく周恩来路線である。周恩来と鄧小平は、そのキャリアからも、性格からも、担当分野からも非常に多くの違いがあるわけであつて、一口に言えば、周恩来はまさに國務院、国家の行政の最高責任者であるが、鄧小平はどう見ても有能な党官僚であつて、彼が國務院副総理という形で復権したにもかゝらず、誰もが國務院の政治家とは思わない。ご承知のように中国共産党の中の優秀なオルガナイザーであつたわけである。今日の周恩来体制が、鄧小平の復権を必要としたのだというように理解しなければいけないわけだが、それでは今日の周恩来体制の中にはどういふ問題があるかということを二、三お話してみたいと思う。

先ほど私は中国に於ける脱文革化、或は毛沢東論理の挫折ということを言つたわけだが、これは実は私だけでなく、今日の中国の公式論調がそのようなことをしばしば示唆しているわけである。

文化大革命についても、御承知かと思うが、今日の中国では「批修整風」、修正主義を批判

し、整風を行うという運動が始まっているわけで、この批修整風というのを文化大革命とは区別をして、主席が自ら指導し発動した文化大革命及び批修整風という表現を取っているわけである。しかも批修整風では批修が重点である。批修は何をいうかといえば、劉少奇のたぐいのペテン師、林彪事件の余波を徹底的に一掃しようということである。これが非常に強い最近の論調である。

注目すべきことは、こういう論調を主張する論文は殆どすべてが林彪批判、劉少奇のたぐいのペテン師に対する批判である。これは非常に執拗に行われている。何故かというところ、林彪はすでに肉体的にこの世にいない。林彪事件というのは一種の予防クーデターであつたので、一回限りの事件として終つてしまつたと一般には思われている。にもかゝらず、依然として批修整風をいわなければいけないということは、形を変えた党内斗争が依然として存在しているということである。批修整風を主張し、劉少奇の如きペテン師と批判する論調が、人民日報、紅旗などの約八割を占めているが、後の二割位は文化大革命はまだ終つていないのだという論調である。しかもその二割位は文化大革命及び批修整風運動ということをいわず、林彪でなくむしろ劉少奇批判を表に出している。

中国内部にはこういう政治的潮流があるわけで、この二割の部分が江青グループといわれる人達なのかという人もあるが、もつと広い意味で、周恩来の現実主義路線に対する抵抗と考えてよいわけである。

それは考えてみれば当然であつて、この一年半位の間の中国の変化というものは驚くほどであつて、日本に対してもあれほど軍国主義批判をしていたにもかゝらず、それを言わなくなつたばかりか、最近では日米安保そのものを肯定するような変り方である。三菱は死の商人である。軍国主義の黒い企業だと言つていたのに、三菱の接待に喜んで応ずるというような変化である。こういう変化を我々はそれなりに評価して見なければならぬのであるが、それに対して当然、あれほど毛沢東思想をかゝげ六〇年代後半の文化大革命の嵐を起した中国では、批判があるのが当然である。しかもそのような批判は、先ほど述べたような潮流で、注目すべきことに、最近の一部の指導者は国内的な階級斗争の視点を忘れ、国際的にも階級斗争の視点を忘れていふというような表現がある。平和満喫思想である、かつてフルシチョフの平和共存外交に対して中国共産党が批判したと同じような言葉が、今日の中国の主流派に対して浴びせかけられているということも見ておく必要があると思う。

もう一つ、現実主義進化論を批判せよという一月二十四日付けの人民日報がある。我々は周恩来路線を現実主義というのだが、中国語でもそのまゝ現実主義という言葉を使つて、現実主義の立場に立つてやつている幹部があるが、これは怪しからん、階級斗争を忘れてゐるではないかという意見がある。

中国に於けるこういう国内的な政治的なフリクションの中で、鄧小平が復活して来

た。これを見ておかまいと問題の主題が明らかにならないわけである。そうすると、むしろ周恩来はこれらの批判をかわす為にも鄧小平の力を必要としたのではないか。そして恐らく、鄧小平は最近伝えられている中華全国総工会、労働組合、共産主義青年団、そして婦女連合会というような、文革で破壊された組織の再建に向けて鄧小平の力を必要とするのだらうと思う。

こういうように考えてみると、鄧小平の四月十六日の復権に対しては、内部でかなりの論議があつた筈である。私は、それが三月の中旬、周恩来総理が約二週間にわたつて公式の場から姿を消し、残っている党政政治局員候補及び常務員を含めて三月中旬に約四日間、完全に姿を消したことの謎を解く鍵ではないかと思う。恐らくこゝでさまざまな抵抗にもかゝわらず、周恩来は鄧小平の復権という大きな事態を決めたのではないかと思う。そうすると、鄧小平の復権に対する抵抗があるにもかゝわらず、文革の論理をひつさげてそれに抵抗することが出来ないような状況が一方にあるわけで、伝えられるところによれば、最近毛主席は江青夫人への手紙を公開し、それが学習資料として伝達されている。その手紙そのものが信憑性があるかどうかということは別にして、もしそういう伝達そのものがあるならば、ご承知のようにこの手紙では、文革は自分は本意である。いわば林彪にせられてやつてしまつたわけだ、と言っているが、こういうことさえも言わざるを得ないような、毛沢東をしても文革に対して一種の後めたさを感じさせざるを得ないような潮流

が今日の中国の中にあるということである。これを一口に周恩来路線というように考えてよいのではないかと思う。

こういうように考えると、今日の廖承志訪日団の意味が従来のような子供っぽい政治戦略でなくて、もつと大人としての中国全体の政治戦略というものが浮び上つて来ることもなる。しかも、復活した鄧小平は、すぐに廖承志訪日団を北京空港に送っているし、このことからしても、今度の訪日団と最近の中国の政治的潮流には密接な関連があると考えでよいのではないかと思う。

鄧小平の復活は、何も毛沢東の寛大な幹部政策ではなくて、又、一部に言われているように早く罪を悔い改めたが故ではなくて、やはり文革の時には徹底的に批判され、六九年の九全大会の段階では決して彼の復活というものはあり得なかつた。それが林彪事件を経て、今日の中国の中で始めて彼の復活が可能になつたということに、むしろ今日の中国の政治の変化の大きさを感ぜざるを得ないのである。こういう状況があるので、中国は当面、党の再建、つまり林彪を批判した後、十全大会を開いて新しい党規約を作るといふようなところに迄はまだ行っていないのだが、もしも周恩来路線というものがこのまゝ定着するのならば、大きな潮流はそういう方向に行くのではないかと思う次第である。

しかしながら、依然として全国人民代表大会は開かれていないし、國務院の閣僚もまだまだ空席が多い。林彪異変の後、軍の首脳はまだ全部空席のまゝで、まだ中国の中には政

治的な問題が非常に多いということである。

そこで周恩来について一言触れるならば、私は従来から周恩来に対する評価というものをまだまだすべき時期ではないという気がしている。よくいわれるのであるが、最後に笑うのは周恩来ではないか。彼は非常に遠大な構想を持つている人物ではないか。毛沢東は文化大革命は中国にとつて永久革命であると言つた。しかしながらその永久革命といわれたものはあつたという間に挫折してしまつた。ところが周恩来の遠大な構想に関するならば、毛沢東があれほど情熱を傾けたといわれる文化大革命さえも周恩来の遠大なビジョンの中の一コマではなかつたかと思われるような気がする。

しかしながら、周恩来というのは、毛沢東の權威を傷つけてまで中国の変化というものを前面に押し出すということはやらない。又、そこが周恩来的な、非常に遠大な構想なのではないかと思う。ただ言えることは、今後の中国はますます一つの歴史の蓋然性としてはこの周恩来、鄧小平的な方向に行くであろうということである。

中国というあのよ様な国家の中で、非常にユニークな指導者の特徴を見てみると、毛沢東は何といつても中国の革命の顔である。或は民族主義のシンボルである。周恩来はこれに対し、まさに中国の国家を代表する顔だろうと思う。だから周恩来は常にすごい国家的使命感に燃えて問題を考へているのではないか。これに対し、復活した鄧小平、或はいづれ名譽回復の可能性は充分にある劉少奇という人達は、彼らの經濟調整政策を見ても明ら

かなように、今日の中国が必要とする社会の顔である。今日の中国にとって、民族の顔、革命の顔としての毛沢東というものはすでにもう必要としなくなるわけであつて、今後は中国自身も、ともかく好むと好まざるとにかゝわらず、国際社会の中に組み入れられて行くわけで、ますます国家の顔、社会の顔が必要になつて来るのではないかと思う。

△中国をめぐる国際関係Ⅴ

こゝで第二番目の問題であるが、そのような中国が何故台湾問題に関して最近非常に積極的に解放ということを呼びかけているのであろうか。私はこの問題の一番のポイントはいわば心理作戦であらうと思う。というのは、どう見ても今日の台湾を今の中国の中に回収するといふ余裕はない。これはいろいろなデータをつき合わせてみて不可能なのである。今日の中国では食糧についても絶えず前年比数百万トン、これは数字がいろいろあるが、減産である。今の中国で真剣に叫ばれていることは、いかにして食糧を備蓄し、その為に国民一人一人が一口、二口、三口節約するかといふことがスローガンになつてゐるわけであつて、こういう状況の中で、今、経済レベルそのものが全く違う、生活水準が全く違う台湾を回収する余裕はないことも事実である。そのようなことをした場合に、むしろ領土的には台湾解放が可能になつても、社会的には中国の台湾化が始まるかも知れない。そういう危険を冒すことは殆ど出来ないことである。まして中国の中でポスト毛という状況を

考えた場合に、私が述べたように、周恩来路線が定着する可能性がありながらもいろいろ不確定要因があるわけである。

軍事的に考えても、台湾開放ということが不可能であることはいうまでもない。今日の中国の通常兵力を以てしても、台湾海峡を軍事的に攻略するということとは不可能である。軍事的には、中国はむしろ最近はその備えなければいけないわけで、しかも陸、海、空三軍の指導者さえも空席であるような人民解放軍が、果して台湾海峡の攻防に耐え得るかどうかという問題があるわけで、こういうことをいろいろ考えると、中国が台湾解放を叫べば叫ぶほど、実は台湾解放が不可能になつたことの証明ではないかと思う。しかしながら、これを明らかに対外的にわからせるということは、非常に中国にとつてまずいわけで、台湾解放が長期的課題だということに気付けば気付くほど心理作戦を展開し、いわば対外的に中国の台湾解放ということを訴えなければいけないということではないかと思う。

たゞ、もしも台湾の中で革命が起きるといふなら話は別であるから、中国はそういうことを期待しているかも知れない。しかし今日の台湾の中でそういう現象がすぐにおこると思えないし、心理作戦を考えざるを得ないのではないか。むしろ中国側にかゝつてゐるのは、最近の台湾をめぐる国際関係の変化である。

ご承知の通りアメリカは、ニクソン・キッシンジャー路線の対中国政策によつて「ワン

チャイナ・バット、ット・ナウー一つの中国、だがすぐにではなく」を打ち出し、中国が台湾を長期的に考えていることを読みこんで、それ故、いかに時間を稼ぐかという政策を一貫してとつて来ている。そのことが米中コミュニケにもあらわれて来ている。それ故にアメリカは最近台湾に対してもものすごい経済進出をしているわけで、日本が台湾から相次いで撤収したのをよいことに、自動車、金融、耕作機械その他、非常に進出が激しいわけである。

このようにアメリカも非常に長期的課題としてこの問題を考えているが、たゞ不安定要因になるのはソ連ではないかと思う。そこで私は、最近中国がいかにソ連の問題を気にかけているかということに及ばざるを得ないわけであるが、この問題を考える上で、むしろ最近の中国をめぐる国際関係を先に考えてみたいと思う。

この一月一日以来、中国で叫ばれているスローガンは、新しい毛沢東主席の指示として「深く地下道を掘り、広く食糧を備蓄し、覇権を争わない」というものである。

この「深く地下道を掘り」ということであるが、これはかなり本気であつて、単に反ソ敵愾心をあおる為のスローガンではなくて、かなり大規模なシエルターを掘り進んでいるらしい。それから二番目の「広く食糧を備蓄し」というのも対ソ戦に備えるということだけであつて、一方食糧危機を打開するという二重の目的を持つてゐる。三番目のスローガンである「覇権を争わない」であるが、これは米中コミュニケや日中コミュニケの中にあ

つたアジアに於ける覇権を争わないという意味と、今の中国の中にはいろいろ党内に問題もあるが、もう一度文革のような批判を大びらにやらないで一致団結せよということだと見受けられる。

こういうように考えてみると、中国は今あらゆる意味で対ソ戦に備えるかなり本格的な外交戦略を展開しているのだということになる。この場合に、しかも政府レベルに於いて、中国の側に、中国の戦略に巻き込もうといっているだけに、特に日本に対して中国はソ連との関係が気になるわけである。

今日の中国を見ていると、ご承知の通りブレジネフ・ドクトリンによる封じ込め体制が着々と成果を治めていると見てよい。私はかつてソ連と台湾の関係もいろいろ指摘したが、ソ連は外交戦略のみならず海軍戦略を併用してインド洋からマラッカ海峡、日本海にかけて虎視たんたと戦略を展開しているわけである。こういう封じ込め戦略に対して、中国もどこか弱い間隙を見つけてそこを突破しようとする外交戦略が、まさに今日のアジアに角遂しているということを我々は考えていかなければならないと思う。

日本列島というのは中国にもソ連にももつとも弱い間隙ではないかと思う。こゝは中ソの接近競争なのであるが、これでももてになつていると大変なことにもなり兼ねないということを我々は感ずるわけである。いわば、中ソを操つりながら日本が優位な立場に立っているというような甘い考えではいけないので、もしも両者の間のバランスが崩れた時、日

本は大変な中ソの關係に巻き込まれざるを得ないという状況も出て来るかとも思われる。というのは、最近のように中国が三菱に対してキャタパルトが欲しいであるとか、防衛庁の水上飛行機をオフアーしたいという状況になると、単に中国とソ連の日本に対する接近競争が外交課題だけでなく、まさにひとつも刺戟的な軍事戦略にもなつてくるわけであり、シベリア開発、チュメニ油田の問題を含めて、中国にとつては非常に神経を尖らせざるを得ない。廖承志も言つてゐるが、こういう問題がある時に中ソはそれぞれいけば総合戦略をもつて非常にきめの細かい戦略を提起してゐるわけで、日本はそれに対応し得るだけの外交戦略、軍事力、構想力なりで手を打つてゐるのかどうかということはやはりこゝで問題になる。それがないまゝに、安易に中ソというものを次々に移り動いて行く形であつてよいかどうかという問題がこゝに出て来る。

今日のアジアにおいて、中国の影が拡大すればするほど、アジア諸国は非常な恐怖を持つてゐる。私は ASEAN というのは日本が今後外交的にも重視すべき地域だと思つてゐる。ASEAN の中立化構想というのは、諸国内にいろいろ問題がありながらも、誰か一人だけが抜け駆けの巧名を競つて中国やソ連に接近することをさけようとする知恵なのである。それは、もしも一人だけが先走つた場合、あゝいうアジアの弱小国、しかも中国の外交のゲリラ成果を含めて外からの働きかけ、或は華僑の問題でゆさぶられ続けて来た諸国にとつて中国はいわば前科者なのであつて、中国になびくのは歴史の流れではあるうが、お互

いに共同してこの問題を考えようというあらゆる意味で現実的な中立化構想だと思う。

かつてインドのネールやスカルノ或はアジアの先覚者といわれる人達が五〇年代に掲げた万国スピリットによるところの新興諸国のナシヨナリズム、積極的中立主義に訴えた中立化構想というのは理想主義的な中立化構想であつた。これは私にとつても感動的であつたが、そのもの自体によつてまさに崩れていつたわけである。国際政治、特にアジアの政治というのはそういうきれいなことだけではどうしようもなくなつて来た。現実を知りつくした上で、今回 A S E A N が一種の国際社会に生きる知恵として中立化構想をとえ始めたということは注目してよいわけで、こういう諸国さえもこのように対応しようとしている時に、果して日本にどれだけの知恵があるかということをお我々は考えざるを得ないわけである。

△中ソ関係の新しい動きと国際情勢 V

そういう状況の中で特にソ連を考えた場合、中国はやはり台湾、日本に対するソ連の働きかけを非常に気にしていると思う。田中内閣にラツキーなように中国の態度が急激に変わったのは、まさに昨年来のソ連の働きかけというものがあつたからである。

台湾の問題については、私はかねてから台湾とソ連の関係をかなり気にしていたわけで、そのようなことを言うと、絶対そのようなことはあり得ないという意見もかなりあつたが、

実は私は、国際政治とか国際関係というのは一つの事実が国際社会を動かすよりも、事実によつてでなく、そうなるかも知れないという可能性が意外に動かしていると思う。実よりも虚が国際社会を決めて行くということがあり得る。最近の事態はどうもそういう気配がちらちらと見えるようになって来た。私がこれについて一番始めに感じたのは、例のソ連の台湾に対する働きかけが陰でいろいろあつたこと、ピクター・ルイスが台湾を訪れたのは四年位前だが、或は香港あたりを通じてある中国スペシャリストがモスクワに呼ばれたこともある。

このようなことを北京は察知して、ピクター・ルイスの台湾訪問については一昨年新華社がこれを暴露した。そしてソ連がそのような工作をやつてゐることを非常に非難するのみならず、北京がいかにそれを懸念しているかということを見せつけた。

去年の一月、総評中立労連代表団が北京へ行つた時に、五八年の台湾海峡の危機について北京側が初めて公式に暴露した。私共はいろいろな資料によつて台湾海峡の危機の裏面を知つていたし、さして驚かなかつたのだが、敢えて北京が昨年一月、ニクソン訪中の前にそれを言つたということに問題がある。

これは五八年当時、フルシチョフがこの中ソ連合艦隊を作つてソ連の指導下に台湾海峡を封じ込めようとした。表向きは第七艦隊に対比させるのだと言いながら、中国の領海権を奪おうと思つたのだ、というように中国は言つていた。こういうことを含めて、中国に

とつて台湾海峡はもつとも死活的な意味を持つわけで刺戟的である。しかも明らかのように、金門・馬祖への攻撃は、当時フルシチョフの不当な要求に対する、つまり海軍の問題と雲南省他にソ連の基地を作りたいという要求に対する怒りの爆発であつたというようなことがその後明らかになつてゐる。つまり中国は、あの時アメリカや蒋介石政権に対して怒るよりもむしろフルシチョフへの怒りの為に金門・馬祖に攻撃を加えたという問題があつたわけである。我々はその辺を充分に見ていけないといけないわけで、この点でも国際政治というのは意外に我々の見ている現実以外のところに真相があると言えるわけである。

そこで最近のソ連の艦隊が台湾海峡を通行したということになるわけだが、これはやはり非常に刺戟的である。しかもこれには明らかにいろいろ計算があつたわけで、ソ連はマラッカ海峡において日本と同じ主張をし始めたのみでなく、いよいよ台湾海峡についてもさまざまな探りを入れ始めている。この探りを入れ始めていることは、当然何らかの形の中華民国政府の合意を取り付けていると考えざるを得ない。そこで、今後ポスト蒋介石ということが問題になると、蔣経国のキャリアと性格、その時点での台湾の置かれた地位というものが非常に浮び上つて来ざるを得ないのでないか。

こういうことを考えると、私は必ずしも台湾がソ連につくとか何とか言うことではなくて、最近台湾大学の先生方の間に「何故我々がソ連や東欧諸国と交友を持つてはいけないのか」というような、いわば台湾改革に関するいろいろな提言が出てゐる。こういう問題

を含めて、勿論こういう情報は北京へ行くだろうし、又北京は非常にこの問題を気にしていると考えざるを得ないのである。そして北京は最近、むしろ在日華僑に対する働きかけをやる。これも在日華僑の大部分は日本国籍を取りたいわけであるが、いわばそういう状況の中でさまざまな心理作戦を展開しておくというのが中国の戦略ではないかと思う。むしろその心理作戦に耐え得るような論理と自信を一方で持つて行かないといけないわけであり、台湾解放が目の前にあるように考えると、心理作戦に乗ぜられることになるわけである。どう考えても台湾解放というのは実体的にむずかしいのである。困難であればあるほど、そういう態度に出ているということをお共は注目しておく必要があるのではないかと思う。

これは私がよく話すことだが、中国が甲のことを言つた時は実は乙のことを考えている。或はAのことを言つたらB位のことを考えているというように見た方が正しい。非常口のことを泰平門と書くのだというのは私がよく引用する例であるが、緊急事件の時、日本人は赤で非常口と書くが、中国人は平然をよそおつて泰平門と書く。そういう中国人の対外態度、個性というものを充分考えた上で私共は対応して行く必要があるのではないかと思う。

問題は単に日中友好ということだけでなしに、その背後にはかなり危険な国際軍事戦略というものがあるというのだということをお共は考えておかなければいけないのではないか

と思う。よくアジアには緊張緩和が訪れたのだということを言うが、ところがこれほど危
い言葉はないのである。緊張緩和とは非常に新しい国際政治の概念で、国際関係や国際政
治学の辞引を引いても出ていない。大体一九六〇年代の後半にドゴールやクープドミユル
ビルが盛んに用いた。つまり、それはヨーロッパ的な意味での概念で、戦後の冷戦構造と
いうものが六二年のキューバ危機以来崩れて行く。そういう中でヨーロッパで政治的な多
極化が進み、ドゴールの抬頭があつて従来の冷戦構造と違つた認識が生れて来ている。そ
こで緊張緩和という言葉がクローズアップされた。しかしながら、これを考えると非常に
大きな背景があるわけである。

まず一つには、緊張緩和といつてもヨーロッパにはそれを支えるような条件が存在した
ということ、その一つはいうまでもなく現状維持ということである。お互いにかつての
コミンフォルムとかの働きかけがあつたり、NATOがあり、ワルシャワ条約機構がある
のだが、そういう状況の中で、外からの力によつて社会や国境を変更したりすることが出
来なくなるような状況がすでに定着しているということに対する深い認識があつたという
ことが第一である。

第二には、いわばそれに基いたところの平和的共存、それ以外にやはりヨーロッパとい
うものはないのだということ。もつとも重要なのが三番目の社会的安定度の問題である。
これは東ヨーロッパ諸国をも含めて、従来のような不安定な状況はなくなつた。チエコ事

件というのは確かに不安定要因の一つだったが、これはむしろ東欧自身の西欧化といういわば東欧的な革新である。むしろこれに対して、フランス及びイタリア共産党も戦略的に大きな転回をして、いわば西欧的な共産党への転換を行うことによつて、一挙に暴力的に社会を転覆しようという状況ではなくなつて来ていることも事実である。

こう考えると、どう見てもヨーロッパにおける緊張緩和にはそれなりの歴史的条件があつた。そうして、そういう条件の上で始めてデタントということが意味を持ち、今日のブラントの東方外交というものが意味を持つわけである。そして、しかも忘れてはならないことは、NATOの閣僚会議でもあつたが、こゝで明らかのように、緊張緩和政策に賛成でありブラントの東方外交のような平和外交に賛成だがお互いに兵力の低減、デイスエンゲージメントについては非常に慎重であつて、いわばそういう力を背景にして来た平和を維持する為に、依然として力というものが必要である現実をやはり認めざるを得ないということを同時に提起していることである。こういう中で始めて緊張緩和という言葉の意味が深いものになつてくる。

ところが日本では、新聞もそうだが、国会の議論を見てもすぐにヴェトナム和平、日中復交で、緊張緩和がなつた。又、米中接近で緊張緩和だという議論があり、一部の政党はだから安保はいらぬということというわけだが、アジアを考えた場合に、私が今挙げた三つの条件はどれ一つとして存在していない。ヴェトナム戦争は終結したが、イン

ドシナ半島の将来が現状維持であらう筈がなく、非常に不安定である。ましてや平和共存といつてもアジア諸国の中にはまだまだいろいろの問題が存在している。むしろアメリカの撤退によつて、今後アジアはアジア固有の問題が表面に出て来るわけで、人種戦争或は民族戦争、さまざまな社会的宗教的対立というどろどろした現実が今度は前面に出て来る。そこへ最近の中ソの働きかけが非常に活発に政府を巻きこんでくるわけで、こゝに実はアジアの動揺があり、その時に日本だけがくると背中を向けたように北京と手を結ぶのではないかという不安がアジア諸国の中にあつたわけである。私は昨年、田中総理が北京へ行く前にアジアを廻つて、一体日本はなぜアジア諸国をまず訪問しないのかとつくづく思つた。そういう現実も考えて、同時に中ソというものがいかに今そういう働きかけをしてゐるかということも含めて、我々は問題を充分に考えて行く必要があるわけである。

結論的に述べると、その点で日米安保体制というのは重視しなくてはいけないと思うが、少くとも一九八〇年迄はいかなる変更も加えるべきではない。これは変更を加えるべき要因というものは、言葉の上では衝撃的でも、アジアの現実がないからである。しかも、もし、それに何らかの変更を加える必要性があるとするならば、中ソ友好同盟条約が、これほど対立状態にあるのはどういうことかというところを見きわめる点であらうと思う。というのは、中ソ友好同盟条約というのは日本を仮想敵国のような形で扱つてゐるわけで、これ自身も制定のいきさつからしてすでに中ソの対立があつたのだが、有効期限は三十年で

あるので、その期限である一九八〇年に一体中ソはどのように出るだろうか。お互いに黙つていれば自動延長になるが、必要なければ一年前に通告しなければならぬ。そのようなことも含めて、総合的にやはり考えて行く必要があるのではないかと思う。

そこで私は最後に一、二、問題にふれたいと思うが、周恩来路線が中国にそのような形で定着しつゝあるならば、なぜ周恩来はその現実主義的感覚によつてソ連と和解しないのかという疑問をお持ちだろうと思う。

或は又、廖承志訪日団が来た時に、日本共産党とよりを戻すのではないかというようなマスコミの論調もあつた。この点日本の新聞は政治的センスがないわけで、今の中国が周恩来路線に転換したのは何も中国自身が自信を持つてすべてに成功してそうなつたのではない。まさによぎなくそうせざるを得ないということに中国自身が始めて気がついたわけである。

文化大革命があのような形で挫折し、その挙句に林彪事件が起り、これで一体よいのかという認識が周恩来にはやはりあつたと思う。それが中国をして動かしているということとは、かつての文革的な潮流、ともかく毛沢東も江青も存在しているわけで、こういうものに対する抵抗要因がいろいろある。

その中で周恩来は、六九年以来外交的にも徐々に転換を始めて来て、毛沢東体制下の非毛沢東化ということを計りつゝあるのだが、そういう歯車のついた周恩来的路線というも

のをどこかで停止してしまふとがたがたと行く状態である。だから是が非でも齒車を廻し続けなければならないというのが今日の中国である。だからそういう状況の中では、今の路線を推進して行く上でどうしてもロジックが必要となる。

なぜ、日本の政財界と密着するののかという批判、そういう露骨な言葉ではないにしろ、現実主義進化論を非難せよとか、平和満喫思想とかいうわけである。そういう時にこそ反ソ教育、ソ連が敵なのだという論理が必要になるわけで、それなくしてはいかに周恩来といえども民衆を説得して行くことは出来ない。

こういうことを考える周恩来というのは、その点でも非常にリアルな政治家だから、中ソ戦争というものは大規模な戦争になるとは彼も考えていないであろう。中ソ戦争の抑止し得るぎりぎりのところを知りながら、あらゆる点でソ連に対する戦略を考える、論理をを考えていく、というのが中国である。だから当面中ソ和解の可能性は殆どないわけで、むしろその点ではソ連に対する中国の論調はますますエスカレーションを続けるのではないかと思う。このことは廖承志訪日団によつてもわかつたのではないか。だから日本やアメリカに対して柔軟化するということが、即ソ連に対する柔軟化としての対応ということにはならないのだと思う。この点は同じく日本共産党に対する中国の最近の態度にもあらわれていたわけであつて、この辺の認識は必要なことと思う。

最後に一言、先ほど冗談めかして廖承志訪日団の日本の歓迎ぶりにふれたが、廖承志訪

日団は日本にも中国の対日政策にも大切なのだが、逆に今の中国で一ヶ月開けてもどうというでもないメンバーだというふうに考えることも出来るわけで、あまり政財界の方々が競つて名刺を渡しても、さほど意味はないかも知れないということを申し上げたい。むしろ日本が笑いのものになるのではないかという気もする。

以上、中国問題は非常に重要であつて、これからまさにむずかしくなる。このことは企業レベルにぼつぼつ出ているが、今回の広州交易会へ行つた商社員がいかにあわてたか、中国は値段をものすごくつり上げて、ノイローゼになるような商社員が沢山出ているわけである。甘い幻想だけでは駄目なので、日本人の主体性を堅持しながら、中国と広く深くつき合つて行くといふことしかないと思う。

質 疑 応 答

質問Ⅱ 中国は大使館の問題、台湾の問題等に関して、アメリカに対しては寛容だが日本に対しては厳しい感じを受けるが、これはやはり経済力その他国力の比較があるのだろうか。

応答Ⅱ そうではないと思う。今、中国は逆に日本の経済力に注目しているし、その点でアメリカと違い今までの日中貿易の成果もあるわけで、これはむしろ日本側の中国に対する戦略がいかにかといふことに尽きるのではないだろうか。

つまりアメリカは、一方でニクソンがあのようなドラマティックな外交を展開しながら、台湾問題では中国の本音を読む為に非常に研究している。だからアメリカでは、有名なミシガンの助教授がキッシンジャーにびつたりくつついて北京に行っている。それで北京はいかにして台湾について交渉するつもりであろうかということを全部事前に研究している。アメリカの中国政策の決定過程は徐々に明らかになつて来ているが、非常に相手の手の内を読んで大變な努力をしている。その知恵の差だと思ふ。

アメリカは、いかにして中国に台湾の現実を認めさせるかということを考えている。それは「ワンチャイナ・パット・、ット・ナウ」である。一つの中国で行こう。しかしながら、現実に台湾のあることは無視出来ない。だから「今、すぐにはなく」ということで行けば中国も応ずるのではないか。だが、日本の場合はそういう基本戦略もなく、とにかく我先に行つて周恩来に頭を撫でられようとした。そのことが大きな問題であつたと思うし、政財界、マスコミその他が浮き足立っている時に、官僚そのものも浮き足立ってしまうという問題もあり、さまざまな点で日本は拙劣であつたと言えるのではないだろうか。私はその差だと思ふ。

質問Ⅱ 周恩来の現実路線ということだが、イデオロギーに対立して現実的というのか、或

はイデオロギーは堅持しつゝその解釈でわかれていくのか。マルクス・レーニンの線に沿つて、もしイデオロギーを堅持しているなら、日本に来て階級斗争がどうなつていて将来どうなるかということも見ていつたのではないだろうか。中ソ両方とも戦略の基礎に各国の国内に於ける階級斗争、国際的には植民地斗争的圧迫がどうなつたかを本筋に見て行く点は變つていないのではないだろうか。

応答Ⅱ長期的に見れば、その点は中国も變つていないと思う。しかし、そういう階級斗争なり、階級戦略を持ちながら、いかにして日本に接近しようかという戦略が次に出て来るわけである。そういう次元に於いて今日の日本を見た場合に、むしろ日本共産党とよりを戻すよりは、政財界と結びつきたいというように出てくるわけであつた。その辺をきちんと我々は理解しておかないといけないと思う。だから仮に十年位たつて日本が社共連合という形になつたとする。共産党が政権をとつたとする。その時に、今度は中国が自民党に手を差しのべるかというところでなく、その時は、鄧小平あたりが来て十年前はすみませんでしたと言つて丸ごと頂くというところも逆にあり得るわけで、そういうことは我々は充分に考えておかなくてはならないと思う。

中国自身は、従来のような毛沢東型革命ではもたなくなつて来ている。その辺に過激なイデオロギー中心からだんだん脱却して行かざるを得ない歴史の方向があると思う。しか

しながらマルクス・レーニン主義を捨てるかという、私はそうではないと思う。その時に中国にとつて日本が有利な形に出来ていれば、それにやはり中国は接近して来ると思う。

質問Ⅱ 榮原氏の本の中に、中国には現実主義への反対があり、それに対して、現実論者が弁護する場合がある、とあるが、やはりマルクス・レーニン主義も共產主義化の段階では、中国はまだ社会主義の段階ではこういう政策をとらなくてはいけないという形で、何か現実主義を弁護しているということを書いてあつたが。

応答Ⅱ その点では中国の現実主義というのは、言つてみればマルクス・レーニン主義というより、中国人の民族的個性、相手にはかなり現実を押しつけるが、自らはいつでも都合に応じて原則を変える、というのが中国人のパターンだから、そのように割り切つた方がよいという気がする。

もう一つのご指摘だが、私自身の認識からすれば、かなり自信を持つて言えるのだが、私は中国にも行つたし、ソ連、東欧にもしばしば行くのだが、現在の社会主義そのものがいろいろな矛盾を持つており、むしろ歴史の将来としては、社会主義そのものが資本主義へ傾斜せざるを得ないのであつて、その点我々はおつと自信を持つてよいわけである。日本にとつて二重に不幸なのは、社会主義が実体としてうまく行つていないにかゝわらず、

社会主義が理想であるかのような神話が存在し、それに怯えざるを得ないところに二重の悲劇があるわけである。将来、二十年、三十年たつたら、私は中国、ソ連もマルクス・レーニン主義から徐々に脱却していく方向をとらざるを得ないのではないかと考えている。

質問Ⅱ経済的メリットだが、台湾は貿易面において日本に大変プラスになつてゐる。日中国交正常化は喜ばしいことだが、一方、経済面で台湾交流とのコントロールをうまくやつて行けるであらうか。

応答Ⅱ経済的には今後も日中貿易の可能性は限界があると思う。もし中国経済がもつと自力更生が進むと、プラントにしても自動車にしても当然中国自身の自力更生の対象になるから、その点でも限界が見えてくると思う。むしろ逆に、その時こそ日本の財界に対し、帝国主義ではないかということを出し兼ねない。だから財界の方々にもう少ししつかりしてもらわないと非常に不安な気がする。財界の方は少し人が良すぎる点もあり、中国へ行つて感激してゐる方も多いが、それは一時の状況であつて、長期的に日本に対しそういう保証があるというのではない。現に第一線に立つてゐる人は皆そのことを知つてゐる。プラントにしてもクレームが多くて大変だし、全くペイしない。又、全部中国人が分解して真似をするのではないかという不安をもつてやつてゐる状況であつて、その辺財界の首

腦者の方は日本の国益の為に考えてほしいと思う。日中貿易といつてもアメリカとの貿易に比べたら全然微々たるものであるし、台湾と比較しても、その可能性はまだまだそう大きくない。その点では第一線の人達、今度広州交易会に行つた人達も今まで中国に対して甘すぎたという反省をして来ているのが実状である。

(本稿は五月二十八日の講演録であり文責は編集部にあります)